

内田熊大教授ら渡欧

ローマで“水俣病”発表

熊本大学医学部の水俣病研究トリオの内田横男（生化学）、武内忠男（第二病理学）両教授と徳臣晴比古助教授（第一内科学）の三人は、九月十日から十六日までローマでひらかれる第七回国際神経学会に出席するため、武内、徳臣両氏が今月

十六日午前九時二分熊本駅発上り準急「くまがわ」で出発、内田教授も今月三十一日出発して海外旅行に向かう。武内、徳臣両氏は、

途中オーストリアのウィーンでひらく欧州神経学会と西ドイツのミンヘンでひらく国際神経病理学会に出席したあとローマに向かい内田教授と合流する。国際神経医学会では、三十一年いらい熊本水俣病特別研究班のメンバーとして

三人がそれぞれ病理、臨床部門を担当、世界の奇病と取り組んでこれまで八十三人の患者（うち死亡三十三人）を観察、動物実験を重ねて症状をくわしく調べたが、結論として水俣湾でとれる魚貝類を食へるために起こる中枢神経系の中毒であり、その原因物質として新日窒工場から流される廃液中の有機水銀が考えられるとした同研

究班のこれまでの成果を発表することになっている

なお武内、内田両教授は十月二十日ごろ帰国するが、徳臣助教授は学会後、ヨーロッパ、アメリカに回り各国の内科学事情や研究施設などを視察、来年二月帰国する予定。